

聖書：士師記 1：1～2：5

説教題：不完全な征服

日時：2013年10月27日

士師記は前のヨシュア記に続く歴史書です。ヨシュア記においてイスラエルはついに約束の地カナンへ入国します。アブラハム、イサク、ヤコブに対してなされた主の約束がついに実現へと至ります。しかしヨシュアの晩年においても、なお占領すべき土地と追い払うべき先住民が残っていました。そこでヨシュアはイスラエルの民に、主の助けによって必ず敵を追い出せること、だから最後までこの使命を全うするようにと命じました。そして彼は「私と私の家とは主に仕える」という告白をし、イスラエルの民も「私たちは主に仕えます。」と応答しました。果たしてその後はどうだったのでしょうか。

この書を読んで行きますと、必ずしも理想通りには事が運ばなかったことが分かります。希望に満ちたヨシュア記とは対照的に、幻滅させられる出来事が士師記には連続します。ある人はこの士師の時代を、イスラエルの暗黒時代と呼びました。そんな書なら、わざわざ説教で取り上げないで、もっと他の箇所を読みましょう、と私たちは考えるべきでしょうか。しかしこれもまた神の民の現実の歴史であり、信仰者の生の姿です。私たちはむしろこのような中でこそ、神はその民をどのように扱われるのか、また私たちはどう生きるべきなのか、具体的に学ぶことができるでしょう。決して華やかではなく、輝かしい時代でもないこの書を見て行くことによって、同じく決して簡単ではない私たちの信仰生活に対する、神様からの深い、生きた教えを受けることができるのではないのでしょうか。

1章1節はまず、「だれが最初に上って行って、カナン人と戦わなければならないのでしょうか。」というイスラエル人の問いから始まります。最初にこの1章の区分を申し上げますと、1節から21節ではユダを中心とする南側の部族の戦いぶりが記され、22節から36節ではイスラエルの北側の部族の戦いぶりがまとめて記される、という二部構成になっています。そのスタートは決して悪くはありませんでした。主は2節で「ユダが上って行かなければならない。」と仰せられた後、「見よ。わたしは、その地を彼の手に渡した。」と言われました。この主が共にいて下さったことによって彼らがどんな勝利を取めたかが、まず列挙されています。

一つ目は4～7節のベゼクでの勝利です。主がカナン人とペリジ人を彼らの手に渡されたので、彼らはベゼクで一万人を打つことができました。ここで私たちの注目を引くのは、イスラエルがアドニ・ベゼクの手足の親指を切り取ったという記述でしょう。今日の私たちにすれば、何とむごいことを！と思われそうですが、これは彼がしたことへの正しい報いとして記されています。アドニ・ベゼク自身が7節で、「神は私がしたとおりのことを、私に報いられた。」と言っています。

二つ目の勝利は8節のエルサレム攻略です。ユダ族はここを拠点として、9節にある通り、山地、ネゲブ、低地へと進みます。これら三つの地域をユダ族がどのように攻めて行ったかが、以下記されています。まず10節のヘブロンです。この町を取ったのは、ユダ族出身のカレブです。20節に、「カレブはこのヘブロンからアナクの三人の息子を追い払った。」とありますが、その三人の息子が10節に記されているシェシャイ、アヒマン、タルマイです。ご存知の

ように、アナクとはその地に住んでいた大巨人のことであり、イスラエルは初め、彼らの存在を知って意気消沈しましたが、ヨシュアとカレブだけが、「私たちはぜひとも上って行って、そこを占領しよう。主によって必ずそれができるから。」と訴えました。そのカレブが、あれから40年経って、ヨシュア記によれば85歳になっていたのに、主に信頼して、アナクの三人息子、シェシャイ、アヒマン、タルマイを打ち破ったのです。

次に11～15節に記されているデビルへと進みます。これについてもすでにヨシュア記に記されていました。デビルにもアナクの子孫が住んでおり、カレブは自分の娘の伴侶には信仰の勇者を迎えたいと思って、12節の呼びかけをしたのかもしれませんが。それにオテニエルが名乗りをあげて、勝利します。このあと士師記には12人のさばきつかさが登場しますが、オテニエルはその第1号となる人物です。その彼がここに前もって、このように紹介されていると考えられます。

そして16節以降ではさらに、ホルマ、ガザ、アシュケロン、エクロンとその地域を攻め取ったことが続いて記され、19節には「主がユダとともにおられたので、ユダは山地を占領した。」とまとめられています。ここまでは主によってユダはどんな成功を取めたか、という非常に良い記録になっています。ところが19節後半に突如、思わしくない表現が現われます。「しかし、谷の住民は鉄の戦車を持っていたので、ユダは彼らを追い払わなかった。」21節にも、「ベニヤミン族はエルサレムに住んでいたエブス人を追い払わなかった」と出てきます。せつかくのユダ族を中心とする南側部族の輝かしい勝利の記録が、最後は中途半端な彼らの姿で結ばれてしまっています。

22節以降の北側の部族に至っては、さらに芳しくありません。最初の22節には、主はヨセフの一族とも共におられた、と書かれています。そして彼らのベテル占領がまず記されています。しかし27節以降のマナセ、エフライム、ゼブルン、アシェル、ナフタリ、ダンの記録はどうでしょうか。そこに繰り返し出てくる言葉は「追い払わなかった」というあの言葉です。28節～33節のすべての節に、その言葉が出て来ています。その不吉な兆候はすでに22～26節のベテル占領の記事にも示されていました。ここはかつてのエリコにおけるラハブの出来事を彷彿とさせるものです。しかしラハブは助け出された後、神の民へ組み込まれましたが、今回のカナン人は助け出された後、ヘテ人の地に行って自分たちの町を建ててしまいました。ベテルは占領しましたが、その地にカナン人は生き残り、別な場所にとは言え、彼らの町が再建されたのです。果たしてこれで良かったのでしょうか。そしてそれに続く記述はどんどん思わしくない方向へ進んでいます。27節を見るとマナセの場合、最後の行に「カナン人がその土地に住み通した」とあります。29節のエフライム、30節のゼブルンもカナン人を追い払わなかったので、カナン人はイスラエルの中に住んだ、とあります。ところが31節32節のアシェル、33節のナフタリでは、この表現がひっくり返っています。そこではイスラエルの方がカナン人の中に住んだという表現になっています。さらに最悪なのは34節のダン。彼らは山地の方に圧迫されて、平地に降りてくることさえ許されない状態にありました。

主が共にいて下さったのに、どうしてこんな結果が並んでいるのでしょうか。その説明が2章1～5節です。1節と2節：「さて、主の使いがギルガルからボキムに上って来て言った。『わたしはあなたがたをエジプトから上らせて、あなたがたの先祖に誓った地に連れて来て言った。

「わたしはあなたがたとの契約を決して破らない。あなたがたはこの地の住民と契約を結んで
はならない。彼らの祭壇を取りこわさなければならない。」ところが、あなたがたはわたしの
声に聞き従わなかった。なぜこのようなことをしたのか。』イスラエルの不完全な征服の記録
は、一言で言えば、彼らの不忠実さの表れでした。主の手が短くて、彼らを救えなかったの
ではなかったのです。事実、ほとんどの地域で、彼らは先住民を圧倒していました。先ほどの北
部族の記録の中には、何回も「カナン人を苦役に服させた」という記述がありました。28節、
30節、33節、35節。確かにカナン人たちの方が強そうに見えた時もありました。鉄の戦車
を持っていたカナン人、またダンが相手にしたエモリ人はそうでした。しかしイスラエルは怖じ
気づかずに、主がすでに敵を渡していると仰せられる約束を仰いで戦うべきではなかったで
しょうか。ところが彼らはそれを怠り、自分たちの判断を優先させて、主の命令に従わなかつ
たのです。

主の使いは2章3節でこう宣告します。「それゆえわたしは言う。『わたしはあなたがたの前
から彼らを追い出さない。彼らはあなたがたの敵となり、彼らの神々はあなたがたにとってわ
なとなる。』」これを聞いた時、イスラエルの民は声をあげて泣いた、と4節にあります。これ
はずっと前から彼らが耳にタコができるほど警告されてきた言葉です。もしその地の住民と契
約を結んだり、彼らをあなたの国に住まわせるなら、あなたがたは彼らの娘たちと結婚し、次
第に彼らの礼拝する神を拝み、それがイスラエルを神から引き離す罠となる、と。イスラエル
は「私たちは決してそのようなことはしません。私たちは主に従います。」と誓約して来まし
たが、実際はこの地に入って、ある程度の支配権を握ると、その手を緩めてしまったのです。
彼らはこう考えたのでしょうか。ここまでくれば一安心だ。今すぐ急いで先住民を追い払わなく
ても大丈夫だろう。むしろ彼らがどんな生活をし、何を楽しみに生きているのか、見物するの
も一興ではないか。何か新しい発見があるかもしれない。そうしている内に、自分たちが知ら
なかった楽しみを少し味わってみたいと思い始める。最初はほんの少しだけ、と始めても、次
第にそれにはまっていく。まあこのくらいはと言ってカナン人と仲良く生活する。それは一見
楽しいことであつたでしょう。ところがその生き方は知らず知らず彼らを変な罠に陥れる
ものだったので。たとえ小さな始まりでも、主のみことばへの妥協は、必ずその人の主に対
する忠誠を弱めます。そして一旦始まった妥協はどんどん大きくなり、それによってその人の
心は、その人が思っている以上に主から離れて行ってしまうのです。そうしていつしか主への
信仰をボロボロにされること以上に、取り返しのつかない損失は私たちにありません。

私たちは自分の信仰生活を振り返る時、これを他人事とは思えないものです。自分の歩みは、
このイスラエルのように、不忠実なものになっていないだろうか。これくらい脇道にそれても
問題ないだろう、といくぶん妥協した生活を自分に許してはいないだろうか。地上で我々は完
全ではあり得ないとか、この世の人たちのことも少しは知らなくてはならないと言って、いつ
しかこの世のことにどっぷりつかり、それによって私たちの信仰がむしばまれ、危機的状況に
陥っていることはないでしょうか。もしそうだとしたら、今日の箇所はそういう私たちに対し
て、もう一度自らを吟味して、主に忠実な歩みへ再出発するようにと語りかけているのでは
ないでしょうか。

イスラエル人は泣いて、その場所を「ボキム」と呼び、主にいけにえをささげたと5節にあります。ある意味でこれは良いことです。しかし大切なことは、主の警告に接して、泣いて、そしてどうしたかということ。イスラエル人は泣いた後、直ちに自分たちの土地に帰り、偶像を打ちこわし、先住民を追い払うわざに向かった、などという記述がありません。彼らの涙は果たして真の悔い改めの涙だったのでしょうか。それとも罪がもたらした結果を嘆くだけの涙だったのでしょうか。

Ⅱコリント7章でパウロは、「神のみこころに沿った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせます」と述べています。泣くことは良いことですが、正しい応答は泣くこと以上のものでなければなりません。そこから主に立ち返る具体的な悔い改めの生活へ導かれなければなりません。私たちは自らを点検し、もしこの士師記1章に似ている面があると思うなら、心を引き裂いて主に立ち返り、直ちに主が示してくださっている課題に取り組んで行きたい。主はご自身により頼む者と共において、その歩みを上から助け導いて下います。「『しかし、今、——主の御告げ——心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。』あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるからだ。」(ヨエル2章12～13節)